

現場の苦勞談

外交史料館

外務省外交史料館 内藤 和寿

1. はじめに

外務省外交史料館では所蔵する戦前期外務省記録（明治・大正・昭和戦前期）をアジア歴史資料センターへ提供のため、平成12年度よりこれら記録をマイクロフィルム化した上でのデジタル（CD-R）化を行っています。そこで、これら一連の作業の中で、特にマイクロフィルム化が大きな比重を占めていますので、ここに同業務を担当し、日頃感じていることを記してみたいと思います。

2. マイクロフィルム化作業

記録ファイル（原本）をマイクロフィルム化するに当たって、まず最初に、当館で「検索原簿」を作成しますが、項目として記録の分類番号、件名、巻数のほか各記録ファイルに目次がある場合は、これを抽出しています。ただ、この目次は手書きの上、中にはくずしで書かれているため、該当の本文書と照合したり、「くずし字解読辞典」等を参照したりしながら行っています。また、目次があっても本文書がなかったり、目次の順番に本文書がファイリングされていなかったりしているものは、その確認・調整にかなりの時間を取られています。

マイクロフィルム撮影はファイルの解綴、綴じ直し等を含め、専門の業者が当館講堂を全面使用し、機材を持ち込み約20名の人員で行っています。毎年2000冊以上の記録ファイルを、撮影前にファイルの綴じ紐をはずし、中の文書一枚ずつ折れやしわをのばし、また、製本されたファイルについては解体等を経て撮影に入ります。この過程のうち、補修を施す必要がある文書が見つかった場合は、



外務省記録（目次）

当館員が補修を行っています。この撮影作業中は、撮影業者と当館担当との間で不明点や作業状況等を常に連絡を取り合いながら行っていますが、他業務との兼ね合いも見つつ、作業が順調に進むように留意しています。こうして作成されたマイクロフィルムをもとに、続いて、デジタル化の作業へと移っていくこととなります。

外務省記録の特徴として、各ファイルに収録されている文書はそのサイズも多種類あり、また、内容も和紙、洋紙、タイプ紙、図面、地図、新聞、小冊子、写真、あるいはまた布地の見本等、外国のものを含め多岐にわたっています。加えて、書かれている文字も毛筆、ペン、鉛筆、タイプ、活字等が混在しています。従って、撮影する際は縮率やフィルム濃度等の調整にも注意する必要があります。

3. 予算

本事業（マイクロフィルム撮影およびデジタル化）の平成18年度予算は、約1億1千7百万円認められており、今回は約65万コマ撮影の予定で作業を進めています。しかしながら、財政難のため毎年状況は厳しく、予算獲得に苦慮しているところです。

4. おわりに

このように各ファイルに収録されている文書一枚一枚を確認した上での細かい作業のため、相当根気のいる仕事となっています。また、これら一連の作業は毎年半年以上を費やす大きな事業ですが、完成すればアジア歴史資料センターのホームページ上で順次電子画像により国内外の多くの方に検索・閲覧等利用していただけますので、これを今後も励みにしてゆきたいと思っています。

なお、外交史料館ではこれらの外務省記録を原本でも閲覧することが出来ますし、原本の持つ「迫力」はまた違った意味で臨場感に溢れて感慨深いものがありますので、是非外交史料館にも足を運んで閲覧していただければと願っています。最後に、この事業は多くの方のご協力のもとに成り立っているものですので、この場をお借りし関係者に感謝を申し上げます。



外務省記録（本文）